



Dr. 岡田の 南極物語リターンズ



第14回：ドーム旅行隊あるある(後編)

⑦寒さの感覚がおかしくなる：マイナス40～50℃の環境で長期間生活していると、マイナス20℃くらいでは「今日は暑いなあ」と感じるようになる。天気がよければ半袖で外作業する猛者もいる。⑧計算ができなくなる：脳の回転がすこぶる鈍くなる。計算ができなくなり、特に引き算はやたらと間違える。寒さ、疲れ、寝不足、カロリー不足、高度障害により、脳が機能障害を起こしていると考えられる。⑨ダジャレが増える：各々ダジャレを連発する。ただし各々言いつばなしで、だれも突っ込むことはしない。つまらない



【計算ができなくなる】

ダジャレが続くと、極寒な環境がさらに寒くなる。⑩涙もろくなる：映画やアニメを観ると、すぐに泣いてしまう。寂しさに加え、心がピュアな状態になっているのが原因と思われる。⑪自分達の存在を忘れられていないか気になる：隔絶した環境に長期間いると、「自分たちのことはすでに忘れられているのでは」と不安になる。毎晩昭和基地と定時交信を行う度に「我々ドーム隊のことは誰も気にしてくれてない」と口々に愚痴をこぼす。⑫夢が現実かわからなくなる：目の前に起こっていることが、あまりにも非現実的、非日常的であるため、夢が現実かわからなくなる。⑬自分の人生について考えてしまう：これは僕に限った話であるが、連日長い時間雪上車を運転していると、「僕はなぜここにいるのか」「これからどう生きていくべきなのか」など、自分の存在意義や人生について深く深く考えてしまう。



【ダジャレを連発する】

で、だれも突っ込むことはしない。つまらないダジャレが続くと、極寒な環境がさらに寒くなる。⑩涙もろくなる：映画やアニメを観ると、すぐに泣いてしまう。寂しさに加え、心がピュアな状態になっているのが原因と思われる。⑪自分達の存在を忘れられていないか気になる：隔絶した環境に長期間いると、「自分たちのことはすでに忘れられているのでは」と不安になる。毎晩昭和基地と定時交信を行う度に「我々ドーム隊のことは誰も気にしてくれてない」と口々に愚痴をこぼす。⑫夢が現実かわからなくなる：目の前に起こっていることが、あまりにも非現実的、非日常的であるため、夢が現実かわからなくなる。⑬自分の人生について考えてしまう：これは僕に限った話であるが、連日長い時間雪上車を運転していると、「僕はなぜここにいるのか」「これからどう生きていくべきなのか」など、自分の存在意義や人生について深く深く考えてしまう。

MSWのひとこと ～緊急時の対応～

ご自宅で生活していると「いつもと体調が違う」や「熱が出ているけど、どうしたらいいの？」など、不安に感じる事があると思います。

そんな時、当院の訪問診療を受けている患者さんであれば、**緊急時連絡先**にお電話いただくと、看護師が症状を伺い主治医と相談し、「このように対応したら良いです」や、「〇〇というお薬を飲んで様子を見て下さい」など、対応をお伝えしています。これは、24時間365日体制で行っています。また、必要に応じて緊急往診も行います。

お身体に関する事であれば「こんなこと聞いていいのかな？」と思う様な事でも相談に乗りますので、いつでも遠慮なくご連絡ください。患者さんが安心して穏やかに在宅で過ごせるようお手伝いします。

MSW (医療ソーシャルワーカー)とは・・・
医療・介護・福祉に係る制度など、専門的な知識を持っている医療現場で活躍する相談員です。



つばさ新聞

理事長のコメント

すっかり暑くなり、学校ではプールが始まる季節となりましたが、皆さんいかがお過ごしでしょうか。

さて、皆さんは日頃から災害の備えをしていますか？災害が少ないといわれていた岡山に大きな爪痕を残した西日本豪雨から5年が経過しました。あの時に観た光景が嘘のように、新しい建物が並び、田んぼはきらきらと、青々として穏やかな風景が目に入ります。しかし、あの日被災された方々のお話は当時の状況を生々しく想像させ、私たちにかけがえのない教訓を授けてくれます。

今年に入ってすでに大雪や地震、大雨による災害が各地で起こっています。「もし、災害が起こったらどうする？」と考え、話し合う機会を設けてみてください。

新人職員紹介

(医療法人つばさ 理事長 中村 幸伸)

医師



みゆり 藤原 正貴
トレーニング

外務省として働いていましたが、在宅医療に関わる機会があり興味を持ちました。まだまだ未熟ですが、しっかり学びたいと、患者さんとご家族の思いに寄り添った医療を提供できるように頑張ります。よろしくお願いいたします。

言語聴士



まほ 原 未帆
海外旅行

まだまだ勉強することが多いですが、一生懸命頑張ります。よろしくお願いいたします。

医療事務



さいとう 齋藤 陽子
音楽鑑賞・映画鑑賞

不慣れな部分もありますが、少しでもお力になれるよう努めてまいります。よろしくお願いいたします。

医療事務



まの 前野 真里
音楽鑑賞・ゲーム
インコと遊ぶ

日々知識を身につけ、少しでも皆様のお役に立てるようがんばります。

つばさクリニック

定期訪問 午前9時～午後5時 緊急往診 24時間対応

診療科目 訪問診療・内科
循環器科・呼吸器科・整形外科
〒710-0047
岡山県倉敷市大島534-1
TEL 086-424-0283
HP: www.tsubasa-clinic.net

つばさクリニック岡山

定期訪問 午前9時～午後5時 緊急往診 24時間対応

診療科目 訪問診療・内科・小児科
〒700-0026
岡山県岡山市北区幸還町1-7-7
TEL 086-254-0283
www.tsubasa-okayama.net

Q いつ頃避難を開始したのですか？

その当時同じ地区にあった同グループのグループホームと有料老人ホームの管理者たちと相談し、川の水位が上がりが始めた段階で、この2つの施設入居者をこの施設へ避難させることとしました。この地域は数十年前にも水害が発生しており、「また起こるかもしれない」と考え、グループ内で実施していた避難訓練が役立ちました。

Q 人手はあったのですか？

入居者の避難には、当施設のスタッフだけでなく、グループ会社の介護と関係のない方も手伝ってくれました。水位が上がってきた際は、垂直避難をする事になったのですが、応援に駆けつけてくれたスタッフやその家族、さらには避難してきていた地域住民の方々が力を貸してくれました。エレベーターが停まっており、車いすごと階段を上げるのはとても大変で、皆さんの助けがあったからこそ皆無事だったのだと思います。



Q 救助されるまでの苦勞を教えてください。

施設内への浸水が始まり、総勢150名が3階フロアに避難しました。入居者は介護が必要な人たちです。1つのベッドに2人寝てもらったり、床にマットを引いて横になってもらったりしました。停電しているの、夜はスマホの灯りを頼りにオシメ交換などの介護をしていました。認知症の方も多く、本人の不安を少しでも和らげるよう、スタッフたちが懸命に動いてくれました。



Q 避難所へ避難してからどのくらい経過したのですか？

避難所は決して介護に適した場所ではありませんでした。その為、避難所についてその日から入居者の受入れ先を探しました。一時的にでも家族に引き取ってもらったり、ケアマネさんに別の施設への入居を調整してもらったりしました。最終的に、避難所には3名の方が残り、その方々への介護を継続するために、避難所の一区画を施設として運用しました。スタッフはその方々の介護をしながら、被災した施設の清掃作業も行ってくれました。

時系列

- 7月6日 22時頃 同グループの2施設入居者の避難開始(受入れは1階)
- 7月7日 2時頃 1階の避難者を2階へ
- 6時頃 地域住民の避難受入れ
- 10時頃 2階から3階へ避難
- 状態悪化した3名を救急搬送
- 消防隊のボートで14名救助
- 7月8日 早朝 救助ボートが到着し、全員救助避難所へ移送
- 家族や関係各所へ連絡受入れ先調整開始
- 7月10日 福祉避難所へ移送
- 8月16日 施設の3階のみ再開

西日本豪雨の記憶



シルバーマンションひまわり (有料老人ホーム)

1階 デイサービス・事務所
2階 15部屋 (現在閉鎖中)
3階 21部屋

〒710-1313 倉敷市真備町川辺2076
電話：086-698-8885

西日本豪雨で被災した有料老人ホーム、あの日の記憶と今を聞きました。

Q 施設を再開させて入居者は戻ってこられたのですか？

被災1か月後の8月には浸水しなかった3階から受入れを再開をしました。以前に入居していた方々に再開のお知らせをしましたが、病状悪化した方がいたり、もう真備には戻りたくないという人もいたりして、結局数名だけの再開となりました。同グループの有料老人ホームは年が明けてから再開できましたが、グループホームは閉鎖を余儀なくされました。この施設も未だに2階は再開できていない現状です。

Q 復興した感覚はありますか？

決して元通りとは言えない状況です。水害に見舞われた地域だという理由で利用者だけでなく、施設の人材も減ってしまいました。「この場所で再開するの?」「入居者は来るの?」「新たな職員も来ないんじゃない?」などの意見があったのを覚えています。実際、再開までに離れていった職員も沢山いました。数年経った今でも復興したという感覚は無いです。

Q 振り返って

避難が必要な時、復興に向けて頑張らないといけない時、人の力に助けられました。何よりも地域の皆さんの助けと励ましの声が本当に支えになりました。あの日以来、地域の皆さんとのつながりが強くなったと感じています。是非、恩返しをしたいのですが、コロナ禍に突入してしまっただけで思うようにいきませんでした。今年こそ恩返しに繋がる事を実現したいです。



お話しくださった方
施設管理者の吉田 倫美さん
真備在住で2児の母。当時、子供たちを避難所へ送り、自身は管理者として陣頭指揮にあたった。自身の自宅も被災。



被災後の施設内

避難所での様子